

〈顧問〉  
 〈選者〉  
 〈出席者〉  
 〈投句〉  
 〈紙上選句〉

☆ 川合万里子 先生  
 ◎ 川口孤舟  
 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 後藤保明 小西弘子 山内天牛  
 小早健介 朱牟田惠洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 渡邊盛雄  
 赤田堅 安部眞希子 伊賀山そらお 楠田彦十 久米五郎太 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎  
 中野一灯 早川允章 福島正明 M.H氏(新人) 村田くに子 山本三恵

《互選句》

八点

秋時雨遠流の島の能楽堂 (佐渡) 孤舟 (そ・紀・五・弘・灯・允・正・く)

六点

☆ 「吉野川」吉右衛門の大判事 紀久男 (万・彦・敏・灯・允・く)  
 秋爽や小屋内圧す名調子

☆ (☆↓「小屋内を圧す名調子秋さやか」) 全 (眞・万・弘・敏・正・H)

☆ 白菊や唄本(うたほん)納め友の棺 (☆↓「白菊や友の棺へ唄本も」) 保明 (堅・そ・万・彦・龍・三)

☆ 地虫鳴く独り盃干す闇夜かな (☆↓「地虫鳴き独り盃を干す闇夜」) 保明 (堅・そ・万・彦・龍・三)

☆ 三味の音がまだらに聞こゆ風の盆 (☆↓「ぼつぼつとひびく三味の音風の盆」) 保明 (堅・そ・紀・万・敏・天)

☆ 納得の音を選びて西瓜買ふ (☆↓「叩きみて良き音選び西瓜買ふ」) 昇 (猛・忠・万・保・千・天)

☆ 江戸城の土居の高さや曼珠沙華 亜也 (万・彦・五・敏・允・灯)

☆ ◎よろよろと厨房歩む秋の蜂 天牛 (紀・万・孤・灯・H・三)

☆ (☆↓「厨房」という名詞は固いので中七「厨を歩む」) 紀久男 (そ・万・弘・敏・正)

☆ 秋徽雨(あきついでり) 鼻肩力士の負け続く 恵洲 (眞・万・千・允・正)

☆ (☆↓「下五を「負け続き」にして「アキツ・ヒイキ・リキシ・ツツキ」とキ音で綴ると詩的) 忠彦 (堅・猛・龍・敏)

☆ (☆↓「言葉」↓「訛(なまり)」) 弘子 (忠・五・保・三)

☆ 止まっては坂上がる猫十六夜 (☆↓「十六夜や止まっては坂を上がる猫」) 堂哉 (忠・万・保・龍)

☆ 復員の父に戸惑ふ秋なりし 啓子 (堅・彦・龍・三)

☆ 知らぬ間に雨の過ぎたり秋ひとつ (☆↓「秋ひとつ」の表現がもう一つ胸に落ちない) 啓子 (紀・五・保・龍)

☆ 手折るほどなほ命咲く百日紅 盛雄 (眞・紀・五・灯)

☆ 笑(ゑみ) 栗の誘ふ丹波にけもの道 (☆↓「笑栗の誘ふ丹波の獣道」) 全 (堅・H・く)

☆ 追悼 中山芳博さん 紀久男 (忠・万・弘)

☆ 句仲間に新酒の献杯閑かなり (☆↓「閑けさや新酒の献杯句仲間へ」) 猛 (万・千・H)

☆ 気が付けば蟬から虫へ鳴き替る (☆↓「替る」↓「替り」終止形を用いない) 全 (保・千・H)

☆ 遠太鼓風がとどける秋祭 (☆↓「上五下五共に名詞止めはやめて「風に乗り遠太鼓とどく秋祭」) 忠彦 (紀・猛・万)

☆ 名月が雲と戯れ焦らされる (☆↓「される」↓「さるる」) 孤舟 (万・彦・正)

☆ 墓参り早く呼ぶなと祈りけり (☆↓「来世へ早く呼ぶなと祈り墓参り」) 全 (そ・く・天)

☆ 星月夜胡弓が濡らす袖袂 (☆↓「袖袂胡弓に濡るる星月夜」) 全 (そ・く・天)

☆ 燈台を静かに包む秋の潮

三点

☆ 句仲間に新酒の献杯閑かなり (☆↓「閑けさや新酒の献杯句仲間へ」) 猛 (万・千・H)

☆ 気が付けば蟬から虫へ鳴き替る (☆↓「替る」↓「替り」終止形を用いない) 全 (保・千・H)

☆ 遠太鼓風がとどける秋祭 (☆↓「上五下五共に名詞止めはやめて「風に乗り遠太鼓とどく秋祭」) 忠彦 (紀・猛・万)

☆ 名月が雲と戯れ焦らされる (☆↓「される」↓「さるる」) 孤舟 (万・彦・正)

☆ 墓参り早く呼ぶなと祈りけり (☆↓「来世へ早く呼ぶなと祈り墓参り」) 全 (そ・く・天)

☆ 星月夜胡弓が濡らす袖袂 (☆↓「袖袂胡弓に濡るる星月夜」) 全 (そ・く・天)

☆ 燈台を静かに包む秋の潮

三点

- 木守柿昭和の残る鄙の村  
(☆↓「鄙の村に残る昭和や木守柿」)  
孤舟 (そ・く・天)
- ☆ 呼出しの声爽やかや前相撲  
弘子 (万・允・天)
- ☆ 秋冷や朝のウオーク九千歩  
健介 (眞・猛・万)
- (☆…中七↓「毎朝歩む」)
- ☆ 野分去り娘ら空の旅に発つ  
堂哉 (眞・万・龍)
- (☆…下五↓「旅へ発つ」)
- ☆ 飼育箱みんなからつぽ夏終る  
天牛 (忠・弘・く)
- (☆…「みんな」の中身を知りたい)

二点

- ◎ 月光の波に漂ふ国境  
盛雄 (孤・灯・允)
- ◎ 野分過ぐ見舞電話の有難き  
紀久男 (正・三)
- (☆…「有難き」は「有難く」の方が収まる)
- ☆ 酒と団子両刀遣ふ月見かな  
忠彦 (猛・万)
- (☆↓「月見つつ酒と団子の両刀遣ひ」)
- ☆ 秋刀魚祭りビル街煙にかき消えて  
保明 (万・弘)
- (☆↓「ビル街も煙に包まれ秋刀魚祭」)
- ◎ はじめてのジルバのほてり星月夜  
弘子 (眞・孤)
- (☆↓「初めてのジルバの火照り星月夜」)
- ◎ 立待も居待もさせず雨の雲  
全 (猛・五)
- (☆…「させず」という表現がきついで「立待も居待も月無き雨曇」)

- ◎ 狂暴の台風の目の愛くるし  
健介 (孤・千)
- (☆…「狂暴」と「愛くるし」の取り合わせが異常過ぎる感がある)
- ◎ 密室殺人この手ありしか秋灯下  
恵洲 (紀・彦)
- ☆ ◎ 台風の右顧左眊して迷走す  
昇 (万・孤)
- (☆↓「台風の右顧左眊なほ迷走し」)

一点

- ◎ さめざめと萩の花散る夜深し  
啓子 (堅・孤)
- (☆…「さめざめ」という副詞は「萩の花散る」風情の形容には合わない)
- ☆ 秋冷にたおやかな人リオに佇つ  
盛雄 (万・三)
- (☆↓「リオに佇つたをやかな人秋さやか」)
- ◎ 鉢植ゑや羽煌かす赤蜻蛉  
猛 (保)
- ◎ 秋出水北海道までも襲いけり  
全 (紀)
- (☆↓「秋出水北海道まで襲ひけり」)
- ◎ 新涼や櫛で取り出す窯のピザ  
孤舟 (天)
- ◎ 秋場所や客席いまだ白ばみて  
保明 (万)
- (☆↓「秋場所や客席は未だ白っぽく」)
- ◎ 敬老の日でお彼岸で一族で  
弘子 (千)
- (☆↓「一族で祝ふ彼岸会・敬老日」)
- ◎ よく集ふ家風断やさじ芋殻(をがら)焚く  
堂哉 (万)
- (☆…「断やさじ」||「絶やさじ」、断よりも絶を用いる)
- ◎ 新涼や学期初めの友の顔  
規雄 (忠)
- ◎ 道ならぬ道を踏みきて秋時雨  
亜也 (孤)
- ◎ 新米の一粒づつの命かな  
天牛 (孤)
- ◎ 松茸飯子や孫たちにうんと炊く  
全 (万)
- (☆↓「子や孫らへ松茸飯をうんと炊き」)

● 次回青葉会

- 十月二十七日(木) 午後六時〜八時半
- 文京シビックセンター 五階D会議室
- △ 当季雑詠五句 投句二句
- ▲ 芳博さん追悼句を別枠で募集します。

平成二十八年九月句会報

一 丸紅ビルの月例会会場（コンチエルト談話室）から移つての初回は、文京区民センター（地下鉄「春日駅」すぐ）の一室。改装したばかりの見違えるように綺麗で、使い勝手も悪くありません。今月の第四木曜が休日の為、一日繰り上げたんですが、案の定うつかりされて日を間違えた人が数名居られました。出席は最少の七名（予想十一名）、投句八名、紙上選句は最多の十四名となりました。先ず急逝された当会創立以来の句友・中山芳博さんへ献杯（「越乃寒梅」の純吟新酒「灑（さい）」）。芳博さんを偲びつつ「俳句界」9月号（孤舟さんの三句掲載）、「萬緑」八百号記念の9月号（金子兜太、鷹羽狩行、稲畑汀子らの祝句や万里子先生の寄稿等256頁）、合同句集「きさらぎ」第2号（盛雄さんが代表のきさらぎ句会：平成十年、関西現代俳句協会顧問の小泉八重子師の指導で発足）、伊丹市の「公連協だより」8月5日号（盛雄さんが編集長。きさらぎ句会の作品と小生の拙文掲載）大滝長孝さんの落語会チラシを回覧し乍ら開始。いつもの猛さんの進行役で快調に飛ばし、二次会場の蕎麦屋（すぐ近くの稲廻家（イナノヤ）：真砂町の老舗）のラストオーダーに間に合いました。他界された副島勲さんのことや、句会場選び、豊洲移転トラブルなどが話題に出ました。

二 関係者近詠

筑波嶺へ青田の央をひた走り	万里子	暮れ初むる空七夕の竹を伐る	孤舟
筑波初夏来世は理系女を夢見つ	全	きつつきの総身を揺らしひた叩く	全
炎天の月白かりし空襲下	全	初秋刀魚吃水深く戻りけり	全
女生徒へ日々麦踏み動員令	全	・・・「俳句界」十月号	（新作巻頭三句）
渋滞の高速路抜け新樹光	全	野遊びやベルトの蔭に万歩計	盛雄
金縁の夕焼雲聳つ母校背に	全	核の水避けて風抱く鯉幟	全
年金へ口座新設新牛蒡	眞希子	控え目に咲くや市の花すみれ草	健介
婚以来同じ新聞額の花	全	挨拶しなお去り行かぬ揚羽蝶	全
土産にと母摘みくるる青山椒	全	鰻やの亭主暇さう元女形	紀久男
青梅や全身で泣く泣き相撲	弘子	浴衣着の米朝偲ぶ北御堂	全
二人なら目高覗くも指さすも	全	・・・きさらぎ句会	8月5日（公連協だより）
青葉のロケット見上げ一家のお弁当	全	戻らない往復葉書秋の暮	正明
ロケットを潜り潜りて夏雀	全	灯火親し錆と埃のフランス語	全
月の海青き涼しき地球の出	全	温燭（ぬるかん）や姉弟二人のみ残り	全
穴出づる蟬の不安の如何ばかり	青史	高原の小さき朝市露けしや	允章
太宰忌や白雨の中の赤ポスト	全	竜淵に潜み月は大槻に	全
汗だくの遅参に上座ただ一つ	全	御下りも肴に加へ月の宴	全
歪めるはわれか此の世か金魚玉	全	雲海の落日に酌む傘寿酒	一灯
柳家喜多八追悼	紀久男	オルガンの軋むペダルや鳥渡る	全
梅雨に入るこの世気怠く死に急ぐ	全	夕されば翅で息する秋の蝶	全
梯剛之ピアノリサイタル	全	秋徼雨先に送りし仕事あり	五郎太
青葉風盲導犬も楽堂に	全	東の間の昼寝の跡やシャツの汗	そらお
・・・「萬緑」九月号		犬連れの主婦らの集う暑き宵	全
日めくりを忘れ梅雨入りに迫り越さる	丹野敦男	名画観て残暑の町に戻りけり	全
・・・「俳句」十月号 山西雅子選			

平成二十八年十月十日

紀久男記